

現地英語「難しかった」

各務原市 米派遣児童8人が帰国報告

各務原国際協会(林榮一会長)の小学生米国派遣事業の帰国報告会が16日、各務原市那加桜町の市産業文化センターであり、参加者が貴重な異文化体験を報告した。(土屋健一)

授業体験やホームステイ ジェスチャー交え交流



事業は2011年度から始まり4回目。市内の昨年度の5、6年生40人から応募があり、作文と面接で8人が選ばれた。3月27日から今月1日まで、同市が交流協定を結ぶカリフォルニア州セリトス市を中心に滞在し、ホームステイで家庭生活も体験。現地の小学校では、日本の歌の合唱発表や折り紙、ドッジボールなどで交流し、一緒に授業も受けた。

報告会には、参加者や保護者ら約20人が出席。同行した協会事務局職員が撮影した写真を見ながら思い出を振り返った。

参加者は「英会話は難しかったが、ジェスチャーで何とか理解し合っことができた」「授業で積極的に発言する姿勢を見習いたい」などと報告し、経験を今後の学校生活に生かすことを誓った。

米国派遣での体験を報告する参加者＝各務原市那加桜町、市産業文化センター

「米国の道広い」小学生ら報告会

各務原

各務原国際協会から米カリフォルニア州セリトス市に派遣された小学生たちの帰国報告会が、各務原市那加桜町の市産業文化センターであった。写真。

同協会は、各務原市と教育面での交流を続けるセリトス市に三年前から小学生を派遣。今年も小学五、六年生



だった八人が三月二十七日から六日間滞り、現地の家庭にホームステイしたほか、地元の小学校で歌や折り紙を披露したり、一緒に授業を受けたりした。

報告会で子どもたちは、ホストファミリーに料理を作って振る舞

ったことや、空港や道の広さに驚いたことなどを報告。リーダーを務めた岐阜大教育学部付属中学校一年の大塚詩織さん(三)は「言葉が十分に通じない中、ジェスチャーや単語で意思を伝えることができた」と話した。(水越直哉)